

第七回 單福新野にて英主に遇う、玄徳計を用いて樊城を襲う

— 初めての軍師 —

○前回から今回まで

曹操は「官渡の戦い」で袁紹を撃破し、その後六年かけて北中国の統一成し遂げます（二〇七年）。一方、劉備は袁紹のもとに身を寄せていましたが、袁紹が敗れると荊州の劉備のもとに逃れます。

荊州での劉備は、それまで戦いに次ぐ戦いの連続でしたが、およそ七年にわたり比較的穏やかな日を過ごします（「脾肉の嘆」）。

しかし、劉表の後妻の蔡夫人やその弟の蔡瑁は、劉備に対する警戒心を強めます。

ある日、劉表の宴会に招かれた劉備は、蔡瑁にあやうく殺されそうになります。しかし、愛馬の的盧が檀溪の激流を飛び越えて、劉備は難を逃れることができました。

逃れた劉備は駐屯地の新野にもどる途中、隱者の司馬徽（水鏡先生）と出会います。司馬徽は劉備に、荊州には伏龍（水の中に隠れている竜）と鳳雛（鳳のひな）がいて、そのうち一人でも得れば、天下を平定することができますと言いますが、伏龍と鳳雛が誰であるかは

教えません。

(本文抄)

劉備は檀溪だんけいを渡って進むうち、一人の牧童ぼくどうが牛の背にまたがり、笛を吹きながらやって来るのが目に入った。

牧童は、笛を口から離し、劉備をまじまじとみながら言った。

「將軍は劉玄徳りゅうげんとくさまじゃないですか」

「どうして私の名前を知っているのか」と、劉備はたずねた。

「わたしのお師匠さまは、お客が来ると、劉玄徳という人は当代の英雄だと、いつも話しています。將軍の様子を見て、きつとそうだと思いました」と牧童。

「おまえのお師匠さまはどんな人か」と劉備。

「お師匠さまは姓は司馬しば、名は徽き、あざなは徳操とくそうで、道号(道士の号)は水鏡先生すいけいせいしんといいます」と牧童。

「私をおまえのお師匠さまに会わせてくれないか」と劉備。

牧童に案内されて屋敷まで来たとき、美しい琴の音が聞こえて来た。劉備はじつと耳をす

ましてその音に聞き入った。

と、琴の音がやんだかと思うと、一人の人物が笑いながら出て来て言った。

牧童は指さして、劉備に言った。

「あの方がお師匠さまの水鏡すいきやう先生（司馬徽）です」

司馬徽は「どうしてここに來られたのですかな」と。

劉備は「たまたま通りかかったのですが、あの牧童が案内してくれたおかげで、ご尊顔を拝することができ、喜びに堪えません」と。

司馬徽は、「お隠しなさるな。今日は災難を逃れてここに來られたのでしよう」と笑いながら言った。

そこで劉備が襄陽じやうやうでの一件を告げたところ、司馬徽しばきは「あなたのご様子を拝見したときから、わかっていました」と言い、劉備にたずねた。

「ご高名こうめいはかねがねうかがっておりますが、どうして、今なおこのような境遇に甘んじておられるのかな」

「幸運に恵まれず、ここまで来てしまったのです」と劉備。

「そうではありません。それはあなたの左右に、しかるべき人材がいらないからでしょう」と

司馬徽。

「私は不才の身ではありますが、文の方面では、孫乾・糜竺・簡雍らがおおり、武の方面では、関羽・張飛・趙雲らがついて、忠義を尽くして助けてくれます」と劉備。

「関羽・張飛・趙雲の面々は、万人を向こうにまわして戦う者ですが、惜しむらくは彼らをよく用いる人がいません。孫乾や糜竺らは白面の書生にすぎず、とうてい天下を治め世を救う大才ではありません」と司馬徽。

「わたしも、かねがね山野に隠れた賢人を捜し求めておりますが、残念ながらまだめぐり逢えずにおります」と劉備。

「孔子も十室の邑（十戸ぐらいの小村）にも、必ず忠信あり』と言っているではありませんか。どうして人がいないなどといわれるのか」と司馬徽。

「私は愚か者で、人を見る力がありません。どうかお教えください」と劉備。

「今、天下の奇才はことごとくこの地に集まっています。彼らを訪ねて行かれるべきです」と司馬徽。

「その奇才はどこにいますのですか。いったい誰のですか」と、劉備はたずねた。

「伏龍と鳳雛の二人がいます。そのうち一人でも得れば、天下を安んじることができます」

と司馬徽。

「伏龍と鳳雛とは誰なのですか」と劉備。

司馬徽は手を打って笑いながら「よろしい、よろしい」と言つて、姓名をいわない。

劉備がもう一度聞くと、司馬徽は「もう日も暮れました。今夜は、ここで泊まりになるがよい。それは明日、お話しいたしましょう」と言つて、食事を用意させて劉備をもてなした。

(解説)

司馬徽は劉備に軍師の必要性を説き、「伏龍」と「鳳雛」の存在を教えますが、翌日、劉備はそれが誰かわからないまま、新野に帰り着きます。

ここで単福と名乗る人物が登場します。劉備は単福を伏龍か鳳雛のいずれかではと思いますが、それは違いました。

(本文)

翌朝、劉備は司馬徽に別れの挨拶をしたあと、迎えに来た趙雲とともに新野へ向かった。

劉備が馬首をめぐらし城中に入ったとき、ふいに市場の方から、葛巾かつきん（葛布くすぬので作った頭巾。隠者のかぶるもの）に木綿もめんの着物の人物が、朗々ろうろうと歌いながらやって来る姿が目に入った。

劉備は、「この人が、水鏡先生すいきやうが話していた伏龍・鳳雛の一人ではないか」と思い、馬から下りて挨拶をして姓名をたずねた。

その人物が答えて言うには、「私は潁川えいせんの出身で、姓は単ぜん、名は福ふくと申す者です。以前から使君しくん（あなた）が、賢者を招いておられると聞き、この身を寄せに来たのです」

劉備は大いに喜び、彼を賓客ひんきゃくとしてもてなした。

単福は言った。

「さきほど使君しくん（あなた）が乗っておられた馬を、どうかもう一度見せてください」

劉備が引いて来させたところ、単福が言うには、「これは的盧てきろではありませんか。千里を走る名馬ではありますが、持ち主に禍わざわいをもたらしますゆえ、お乗りになつてはいけません」

劉備は「すでに禍はあったのだ」と言い、檀溪たんけいを飛び越えた一部始終を説明したところ、単福は言った。

「しかしそれは、持ち主を救ったもので、禍をなしたのでありません。いつか必ず禍わざわいをなすにきまっています。禍わざわいを祓はらう方法があります」

「それは、ぜひ教えてもらいたい」と劉備。

「殿が恨みをはらしたいと思われる者に、この馬をお与えになればよろしい。その者が禍にあつてから、お乗りになれば、おのずと平穩無事となります」と単福。

「貴公は私に正道を教えることなく、他人に禍を転嫁し、私に利益を受けさせようとするのか。そんな教えは聞きたくない」と劉備は顔色を変えて言った。

「かねてより使君は仁徳あふれる方だと聞いておりましたが、すぐには信じる気持ちになれません。それで、試させていただいたのです」と単福はあやまった。

劉備も態度を改め、「私には人に言われるような仁徳はありません。これからは、どうか先生にお教えいただきたい」

「私はこちらに参りましたとき、新野の住民が『新野の牧（長官）、劉皇叔がおいでになって、民は豊かに足る』と歌っているのを耳にしました。これで、使君の仁徳が人々に行き渡っているのがわかります」と単福。

こうして、劉備は単福を軍師とし、人馬の訓練にあたらせた。

劉備は単福を初めての軍師として迎えます。単福の本名は徐庶といひます。わけがあつて本名を隠していることにしています。徐庶については『三国志』の注に引く「魏略」に記述があります。少し紹介すると、

徐庶の初めの名は徐福といひ、もともと名家の出ではなかつたが（本文では「本と単家の子」、若いころは任侠を好み、劍の使い手だつた。かつて人にやとわれて仇討ちをし、白色の土を顔面にぬりつけ、髪をふり乱して逃走したが、役人に捕らえられた。その姓名を尋ねられても、口を閉ざしていわなかつた。のちに強く感じるところがあり、心を入れかえて学問に励んだ。中原で戦争が起きると南方の荊州に旅し、諸葛亮と特に親しくなつたとあります。

○単福の名について

単家とは本来「権勢のない家柄」という意味ですが、私の目にするかぎりほとんどの方が、『三国志演義』の作者は単家の「単」を姓と読み間違えて単福と名乗らせたとしています。

しかし、あとの本文で曹操の参謀の程昱は、徐庶が昔任侠に身を投じていた時、名前を変えて逃亡したと述べています。ですから、作者が「単家」の意味を知らずに、間違えて名付

けたのではなく、徐庶の変名として便宜的に『三国志』の注にあった「単」という語を使ったのだと思います。

『三国志演義』では、この単福（徐庶）を劉備の軍師として大活躍させます。徐庶でもこれだけの働きをする、ましてやこれから出てくる諸葛孔明はもつとすごいんだよ、といわんばかりです。

このとき、曹操側の大将である曹仁が樊城に駐屯して、新野の劉備と対峙していました。曹仁は、新野を攻略すべく攻めよせます。徐庶の、軍師として初めての采配ぶりが描かれま

（本文抄）

このとき、曹仁は部下の呂曠りょくわうと呂翔りょしょうに五千の兵を与え新野を襲わせた。

劉備は単福に相談をもちかけると、単福は言った。

「関羽殿に敵軍の中央を攻めさせ、張飛殿に敵軍の後方を攻めさせ、殿は趙雲殿とともに、正面で敵を迎え撃たれたならば、敵をうち破ることができません」

かくして、劉備は出陣した。

と、数里も行かないうちに、もうもうと土煙つちけむりりがあがり、呂曠・呂翔が軍勢を率いて現れた。

劉備は、大声で呼ばわった。

「そこへ来たのは何者だ。わが領地を侵すとはけしからんやつだ」

呂曠りよきゆうが馬を勧めて言うには、

「われこそは大将呂曠である。おまえを生け捕りに来た」

劉備は大いに怒り、趙雲を出馬させた。趙雲の鎗やりの一突きで呂曠は馬から転がり落ちた。

そこへ劉備が攻めたてるや、呂翔りよしょうは逃げ出した。

呂翔が逃げる途中、一手の軍勢がふいに現れた。先頭に立つ大将は、これぞ関羽。関羽に攻めたてられて呂翔が逃げ出すと、またも一手の軍勢に行く手をさえぎられた。先頭に立つ大将は、これぞ張飛。

「張翼徳ちやうよくとく(張飛のあざな)ここにあり」と呼ばわるや、ただちに呂翔めがけて突きかかると、呂翔はもんどり打って馬から転がり落ちて死んだ。

残りの軍勢が逃げ出すところを、劉備が追いかけてその大半を生け捕った。かくて劉備は新野にいんに凱旋がいせんすると、単福を手厚くねぎらい、全軍に恩賞おんしょうを与えた。

さて、二将の敗戦に激怒した曹仁は、手勢を総動員して一挙に新野を攻め平らげようとした。

かたや、単福は勝利を得て新野に帰還すると、劉備に向かって言った。

「曹仁は二将（呂曠・呂翔）が殺されたと知れば、必ず攻めて来るにちがいありません」

「どのようにして迎え撃てばよいか」と劉備。

「向こうがありつたけの兵を率いて来るなら、樊城はがらあきです。その隙に奪い取ればよろしいでしょう」と単福。

劉備がその計略はいかにとたずねたところ、単福は声をひそめ、これこれしかじかと耳打ちした。劉備は大いに喜び、手配りをすませた。

そこに突然、「曹仁が大軍を率いて河を渡って攻めて来ました」との知らせがあった。

両軍が対峙すると、趙雲が、相手になる大将はいないかと呼ばわった。

曹仁は李典りてんを出陣させ、趙雲と戦わせたが、李典はともかなわないと見て、馬首をめぐらし逃げ帰った。趙雲は馬を飛ばして追撃したが、敵軍から矢で射すくめられ、しかたなく自陣にもどった。

李典は曹仁に言った。

「敵軍はなかなか手強いので、軽く見てはなりません。いったん樊城にもどるべきです」

曹仁は大いに立腹し、「おまえは出陣前からわが方の士気を鈍らせ、今また寝返りを打とうというのか。打ち首だ」と言うとき、李典を引きずり出させ、首を斬らせようとしたが、諸将が必死になって命乞いしたため、やっと思いとどまった。

そこで、李典を後詰めにまわし、曹仁みずから兵を率い先鋒をつとめることにした。

翌日、曹仁はある陣形をしきおわると、劉備のもとに使者をやつて、「わが方の陣形がわかるか」とたずねさせた。

そこで単福が高台に登って敵陣をながめ、劉備に説明して言った。

「これは『八門金鎖の陣』です。見たところ八門整っているようですが、中央部に弱点があります。ですから東南の角から突入し、真西から出れば、あの陣は必ず混乱します」

劉備は、趙雲に敵陣の東南から突入し、そのまま西に出よと命じた。

趙雲は命令を受けるや、ただちに東南の角に向かい、敵陣のどまんなかに突入した。そして、西門から飛び出したかと思うと、また方向転換して東南の角に向かった。曹仁軍が大混乱に陥ったところを、劉備が遮二無二攻めたので、曹仁軍は大敗を喫して撤退した。

曹仁は敗北してはじめて李典の言葉信じ、ふたたび李典を呼んで相談をもちかけた。

「私はここにいても、樊城のことが気になつてなりません」と李典。

「今晚、敵陣を急襲し勝利を得たなら、もう一度作戦を話し合おう」と曹仁。

「なりません。劉備には備えがあるにきまつています」と李典。

「そんなふうにあれこれ疑つてばかりいたら、兵は動かせないぞ」と曹仁。

こうして曹仁は李典の意見に耳を貸さず、みずから軍勢を率いて先鋒となり、李典を後詰めにすると、その夜、劉備の本陣に急襲をかけることにした。

さて、単福は言った。

「今晚、曹仁が必ず夜襲をかけてきます」

「どのようにして防げばよいか」と劉備。

単福は「すでに考えております」と言うと、ひそかに手配りを整えた。

曹仁の軍勢が劉備の本陣に近づくと、劉備の陣の四方に火の手があたり、柵が燃えはじめた。

曹仁は、さては謀られたかと悟り、慌てて軍を撤退させようとすると、趙雲が攻め寄せて来た。曹仁は自陣に帰る暇もなく、大慌てで北の河の方へ逃げ出した。

ようやく岸について河を渡ろうとすると、岸边に一手の軍勢が殺到した。先頭に立つ大將は張飛。曹仁は死にも狂いで戦い、李典が曹仁を守って船に乗り込み河を渡った。曹仁の兵の大半は水中で溺れ死んだ。

曹仁は河を渡り、急いで樊城の城壁まで来ると、部下に「開門」と呼ばわらせた。その瞬間、城壁の上から太鼓が鳴り響いたかと思うと、一人の大將が大声で怒鳴った。

「われ、すでに樊城を奪えり」

一同びっくり仰天し、誰かと思えば、これぞ関羽。

曹仁は大いに驚き、馬首をめぐらし逃げ出した。曹仁は夜を日についで許昌へ向かった。その途中、はじめて単福が劉備の軍師となつて、計略を立て作戦を決めていることを知ったのだつた。

(解説)

劉備は、はじめて得た軍師徐庶の計略で、二度にわたり曹仁軍を破ります。最初は、関羽と張飛に左右から出撃させ、劉備と趙雲は前方からと、三方から挟撃する作戦が見事に凶に当たり、曹仁の二將を破ります。

次いで曹仁が自ら大軍を率いて攻めてきます。曹仁は「八門金鎖の陣」の陣立てをします。徐庶はこの陣をやぶる方策を趙雲ちやううんにさずけ、これも見事に打ち破ります。曹仁をやぶっただけでなく、居城の樊城も奪い取ってしまいます。

ここでは、軍師徐庶の卓越した智謀を描きます。もちろんフィクションですが。ここまで、劉備には関羽や張飛などの猛将はいましたが、軍師はいませんでした。ここで劉備は、司馬徽に教えられた軍師の重要性を、実戦を通して痛感します。

徐庶のようなすごい軍師いたら、諸葛孔明はででこなくともいいのにと思ってしまったます。まして徐庶と諸葛孔明が劉備のもとで顔を揃えたら、劉備が中国を統一しても不思議ではありません。しかし、『三国志演義』は歴史小説なので、史実をまげて劉備が中国を統一したとすることはできません。ここで、曹操は徐庶を劉備から切り離す計略を考えつきます。

(本文)

さて、曹仁は李典ともども許都に帰ると、地面にひれ伏して曹操に謝罪した。

曹操は言った。

「勝敗は兵家の常だ。しかし、いったい誰が劉備のために策を立てているか」

曹仁が単福の策だと言うと、曹操は「単福とは何者か」とたずねた。

すると、程昱ていよくが言った。

「それは単福ではありません。その者は幼いころから好んで撃剣を学び、他人にかわって仇討ちをして人を殺し、髪をふり乱して逃亡しましたが、役人に捕まってしまいました。姓名を聞いても答えないので、役人は彼を車に縛りつけ、太鼓を鳴らしながら市場のなかを引き回し、町の人々から名を聞こうとしましたが、顔見知りの者も、彼の名前を言おうとはしませんでした。そうこうするうち、仲間がひそかに縄をほどいて彼を助け出しました。

そこで名前を変えて逃亡し、心を入れ替えて学問に励み、名のある人のもとを訪れ、いつも司馬徽と議論するようになったのです。

この人物こそ潁川えいせんの徐庶、あざな元直げんちよくであり、単福というのは仮の名にすぎません」

「徐庶の才能はきみと比べてどうだ」と曹操。

「私の十倍はあります」と程昱。

「そんな賢者が劉備に付いて輔佐ほさをつとめるとは、残念しごく。劉備に翼を与えるようなものだ。どうしたものだろう」と曹操。

「徐庶は向こうにいますが、丞相が用いたいとお考えなら、こちらへ召し寄せるのは簡単で

す」と程昱。

「それは、どうするのだ」と曹操。

「徐庶は非常に親孝行な人物です。幼いころ父を亡くし、家にいるのは老母だけです。近頃、弟の徐康が亡くなり、老母の面倒を見る者がいません。ですから、使いの者をおやりになり、老母をだまして許昌に連れて来させ、手紙を書かせて息子を呼ばせたならば、徐庶は必ずやつて来ます」と程昱。

(解説)

曹操は徐庶の母を呼び寄せ、劉備のような逆臣に息子を仕えさせないで、自分に仕えるように手紙を書けと言います。怒った徐庶の母は、曹操を怒鳴りつけ、恥を知れとばかり曹操に硯をなげつけて反撃します。

そこで、程昱は曹操に、徐庶の母親の筆跡を真似て手紙を書き、徐庶をだまして呼び寄せるように言います。親孝行な徐庶は偽の手紙を受けとると、止むなく劉備に別れを告げ、曹操のもとに行くことになります。

(本文)

(曹操は) 徐母に手紙を書かせようとした。

と、徐母は言った。

「劉備とはどんな人ですか」

「沛郡(たくだん)の誤り) 出身の身分の低い人間なのだが、勝手に皇叔(こうしゆく)(皇帝の叔父) と称するなど、まったく信義(しんぎ)のないやつだ。いわゆる外見は君子、内実は小人といった男だ」と曹操。

「何を言うのか。玄德さまは中山靖王の末裔(まつえい)、孝景皇帝の玄孫(げんそん)に当たる方で、りっぱな人物にへり下り、謙虚な態度で人を扱われるなど、その名声は、わたしですら聞いています。子供や年寄り、牧童や樵(きり)でさえその名を知らない者はおらず、当代の英雄とはあの方のことです。息子があの方お仕えたのは、良き主君を得たというもの。おまえは漢の丞相と名乗っているが、実は漢の逆賊じゃ。それをあべこべに玄德さまを逆臣呼ばわりして、息子を名君から暗君に向かわせようとは、恥ずかしくないのか」と徐母は怒鳴りつけ、硯(すずり)を取って曹操に投げつけた。

曹操は激怒し、徐母を引きずり出し、斬り殺させようとした。

それを程昱は慌てて制止し、曹操を諫めて言うには、

「徐母が丞相に逆らったのは、死のうとしたからです。徐母を殺せば、丞相は不義の汚名をこうむり、彼女の徳義を完成させてやることになります。徐母が死ねば、徐庶は必ず死にも狂いで劉備を助け、仇を討とうとするでしょう。生かしておいて、徐庶の身体と心を分裂させ、たとえ劉備を助けても、力を尽くすことができずに仕向けるに越したことはありません。徐母をここに引きとどめておけば、私に徐庶をここにおびき寄せ、丞相に仕えさせる策があります」

曹操はこの意見に同意し、徐母を殺さず、別室で暮らさせた。

程昱は毎日のようにご機嫌伺いに行き、徐母を実の母のように扱った。また、しょっちゅう贈り物をとどけ、そのたびに必ず自筆の手紙を添えた。このため徐母も自筆で手紙を書いた。返礼したのであった。

程昱はこうして徐母の筆跡を手に入れると、その字体を真似て一通の手紙を書き、これを新野県の「単福」のもとにとどけさせた。

程昱の部下が母からの手紙をとどけに来たと知った徐庶は、事情をたずねた。

程昱の部下は言った。

「お母上のお言いつけで、手紙をおとどけにまいりました」

(※手紙には、自分は牢獄に入れられ、助けに来てくれるのを待っていると記されています。)

徐庶は読みおわると、涙があふれだして止まらなかった。

そこで手紙を持って劉備に面会を求めて言った。

「私はほんとうは潁川えいせんの徐庶、あざな元直という者です。災難を逃れるため、単福と姓名を変えていたのです。以前、司馬水鏡(司馬徽)は主君を見分ける眼力がんりきがないと私を叱りつけ、

『劉豫州(劉備を指す)がここにおいてなのに、どうして仕えないのか』と申しました。

そこで、私はわざと市場で歌を歌い、使君の注意を引いたのです。幸い使君は私を重く用いてくださいました。しかし、残念なことに、老母が曹操の奸計にかかり、許昌に連れて行かれ、殺されそうになっております。老母からの手紙がとどき、来てほしいと申ししておりますので、行かないわけにはまいりません。犬馬けんばの労ろうを尽くし、使君にご恩返しをしたいと思っておりますが、老母が捕えられた以上、とても力を尽くすことはできません。今はお暇いそぎをいただきます」

劉備はこれを聞くと大声をあげて泣きながら言った。

「母と子こそ生まれながら固い絆で結ばれたものだ。どうか私のことなど気にかけないでも

らいたい。母上と会われたあと、また教えを受ける機会もあるだろう」

劉備は徐庶と轡くわを並べて城門を出た。長亭ちやうてい（街道筋の休憩所）に到着すると、別れの挨拶をし、「私は不運にも先生の教えに接することはできなくなりますが、どうか新しいご主人に尽くされ、功名を立てられますように」と劉備。

「私は才能乏しく知恵もありませんのに、使君しくんに重く用いていただきました。今、不幸にして中途にてお別れするのも、老母のためにはかなりません。たとえ曹操に脅迫されても、私は生涯、彼のために策を立てません」と、徐庶は涙ながらに言った。

「先生が行ってしまわれたうえは、私も世を捨てる覚悟です」と劉備。

「どうか使君には他にすぐれた輔佐をお求めになり、ともに大業たいぎやうを成し遂げられますように。そんなに落胆らくたんなさってはいけません」と徐庶。

「天下の賢者といつても、先生の右に出る者はいないでしょう」と劉備。

別れぎわに、徐庶はふりかえって諸將に言った。

「どうか、あなたがたは使君によく仕え、名前が青史せいし（歴史書）に書き記されるよう努力され、終わりをまつとうできない私の轍てつは踏まれないよう」

諸將はみな悲しみ嘆いたのだった。

(解説)

徐庶は「孝」と「義」の板挟みいたはさとなって悩みますが、結局は母のもとへ向かいます。劉備も「母と子のきずな」が大切だと、徐庶の行動に理解を示します。

『三国志演義』は壮大なフィクションで、司馬徽から徐庶、そして徐庶から諸葛亮の登場へと話をつなげていきます。

『三国志』では、後、荊州で曹操の追撃をうけた劉備に、諸葛亮と徐庶はともに随行しています。しかし徐庶の母親が曹操軍の捕虜となったので、徐庶は劉備に別れを告げて曹操のもとに赴きます。そしてその後は魏に仕え、右中郎将うちゅうろうしょうや御史中丞ぎよしちゆうちゆうじやうに昇進しています。ですから、史実では徐庶と諸葛亮はともに劉備に仕えていた時期がありました。

諸葛亮は徐庶の才能を高く評価していました。後年、魏での徐庶の官職を聞いて、魏はとりわけ人物が多いのだろうか。どうしてそんな官にしかついでいないのだろうか、と慨嘆がいたんしています（『三国志』諸葛亮伝の注「魏略」ざりやく）。

また、諸葛亮は蜀の丞相になったとき、「職務を携わる者は人々に意見を求めて参考にしなければならぬ。自分と意見が違うからといってそれを認めなければ、仕事に欠陥を生ず

る。異なる意見を検討しなおしてこそ、適切な施策も生まれてくるものだ。なかなかできないことだが、ただ徐元直じよげんちよくだけはこうしたことに迷わず対処することができた。元直の十分の一でも真似するようとするなら、それは国家に対し忠義な行いとなり、私の過失も少なくなる」と述べています（前掲書）。

「竹林の七賢ちくりん しちげん」の嵇康けいこうは「徐庶は母親のために劉備のもとを離れたが、諸葛亮はこれを止めなかった。これこそ真の友情である」と「山濤さんとうに宛てた手紙」の中で述べています（『漢・六朝・唐・宋散文選 中国古典文学大系23』、平凡社）。

いずれも、徐庶と諸葛亮の間に、率直な心の交流があったことを示しています。

劉備が初めて獲得した名軍師の徐庶でしたが、曹操の計略によって劉備のもとを去ることになります。しかし去るにあたり、徐庶は諸葛亮を劉備に推挙します。それは次回で。